

## キール便り (つづき)

週一回開かれ、キール以外からも講師が呼ばれて来ます。

ウンゼルト先生の仕事には古典的理論が広汎にでて来ますが、それは彼がミュンヘンで、ゾムマーフェルト教授の弟子だったと聞けばうなずけるでせう。徒らに新奇を追う事を嫌い、あくまで本質的な重要性を持つ問題を、物理的意味を明らかにしながら深く究めてゆくという彼のやり方は、数多くの弟子の論文にもよく表われています。何でも、論文において数行で要旨の説明出来ない様な理論はいい理論でないのだそうです。観測面でも経験豊富なのでいい加減な事はいえません。ウンゼルト教授個人的には非常に親切な人で、私の所でも彼の家で使った子供ベットを借りたり、幼稚園のことを教えてもらったりしました。しかし学問的な面ではなかなか厳しく、その御意見も時には頑固さえみえます。天体物理ゼミナールの題目は殆んど自分で書き抜いて来て学期始めに割当てが行はれます。ゼミナールでも一番前に坐って一番多く発言されます。時には、例えば、話たくみにまとめて来た学生に「君、君、大切なのは話し方ではなくて内容なのだよ」といわれる様な辛辣な皮肉もあります。それぞれに次々と優れた研究を発表しているベーム夫妻に、小学校一年から2才までの手のかかる子供が3人もあったのは驚きでした。手伝いを頼んでいるとはいうものの決して容易な業ではありません。彼らは子供と家政婦をつれて9月始めにパークレーにゆきましたので、その留守の間私共が住居を借りています。

話が編集子の意に反する方向に走りまわったので、こちらで本筋(?)に戻しませう。家族と一しょだと研究の面では相当拘束もうけますが、反面そうでなければ得られない様な体験も出来ました。以下ドイツ人について何だか殊更に意地の悪い見方をしていると思われるかも知れませんが、沢山旅行記が出まわっている様ですので、私はむしろそれらを補うつもりで思いつくままにかいてみます。今のドイツは面積では東西あわせて日本と殆んど同じ、その2/3が西独です。しかし日本と正反対に15%だけが使用不可能な土地です。人口は東西通算して7200万、西独がその7/9を占めています。土地柄が民族性が、ドイツの住宅は内部はなかなか立派で、オランダで梯子の様に狭い階段を上下していた私には此方の家は洵に快適です。窓一つにしても、ハンドル一つで窓が横に開いたり、縦に開いたりする仕掛けになっていたり、一枚の窓ガラスの中に更に換気用の小窓がついていたり、なかなか凝っていて、「住み倒れ」といわれるのも無理からぬと思います。

温泉でのんびりしたオランダ人とくらべて私が此方では一番感じたのは、ドイツ人は一般に“こわい”顔をしているという事です。男は誰でも鉄カブトをかぶせれば

直ちに勇取な兵隊になりそうです。その上警官も駅員も郵便局員も戦時中にみられたナチスの制服と大同小異の制服をきています。今でも若い人達は「ユニフォーム」即ち制服なるものに強いあこがれを持っているそうです。

「働くために生きている」と称されるドイツ人は成程よく働いています。道路工事でも早朝から始めていますし、大学でも夜おそくまであちこちの窓に灯りがついています。日曜日ですら不信心なキリスト教徒が研究に來ています。尤も最近では多くの会社で週5日労働制をとって居り、土曜日と月曜日は学童の病欠欠席が目立つのだそうです。

ドイツ人が好んで使う言葉に“Regel”(規則)と“verboten”(禁止)があります。特に後者は到る処の立札にみられます。日本で「〇〇禁止」の札をみても別に恐いとも思いませんが、この“フェルボータン”という言葉には威圧感があり、人々も実際よく守っている様です。どのアパートにも裏庭に体操の鉄棒と同じ型の物が立っています。ただ砂場がありません。之は主婦達がカーペットを掛けて埃を叩くために不可欠の道具立てなのです。いい憂さばらしになるだろうと思うのですが、遅いおかみさんたちが力まかせにパンパンと叩くその凄じい音はゆうに一町四方へはひびきます。しかしこれも正午から2時迄の昼食、午睡の時間には「其筋の命により」禁じられています。沢山の人が犬を飼っていますが、殆んどすべての店には入口に犬の画が張ってあり、それには「我々が入ってはいけないのだ」とかいてあります。しかし糞の方はおかまいなしとみえて、歩道であろうが、よその家の芝生であろうが自由に用を足させていますから、歩くときには注意が肝要です。

一般にドイツ人は親初で、かつ好奇心にとんでいます。道端で地図を拡げて思案していると、直ぐに傍に来て「何処へ行くのか」と声をかけてくれます。外国人、わけても日本人には親初なのですが、果して心底からそうなのか、又ドイツ人同志でもそうなのか。一般に日本人は外国人にはとても親初だが、お互い同志には甚だ不親初だとよくいわれますが、それとよく似た感じを私も時々持たされました。或るドイツ人はこういいました、「ドイツ人は外国人をお客としてはとても観望するが、しかし彼等がドイツ人の内部に入って来ることを極度に嫌う」と。個人主義の発達したオランダでは、友人と大分親しくなっても或る線までゆくと「個人個人が城だ」といった何かカチンとぶつかる様なものを感じましたが、ドイツではビールをのんでワイワイいながら、日本流の「肚をわたつ」つきあいに入ることがわりと楽に出来そうです。又彼等もそんな交際がしたい様にみうけられます。愛憎の表現は我々の目からすると随分激しく、親しくなると強く抱き合っただけにキスするという様な

らねば承知しない。この代りに一旦こぢれると、すれちがっても睨みあって過るか或はブイとソッポをむく、といった調子です。また日本人が他人の思惑を気にし、特に外国人に対しては控目な、往々にして卑屈なのちがって、一般のドイツ人は他国の事はあまり知らず(或は知ろうともせず)強引に自己流を通す所があります。私共は前に10ヶ月程音楽の教授が渡米中にその住宅を借りていたのですが、そこの若いインテリの夫人(勿論ドイツ人)が米国から帰って「ここでまたまたよく肥った自己満足に溢れた顔ばかり見るのはウンザリだ」と洩らしていました。「ドイツ人なら契約書があるが、日本人ならそんなものは要らない」という位日本人びいきのドイツ家庭に二階を借りたあるお医者さん一家が、あまり親しくなりすぎ、遂に煩わしい日常関係にたえかねて、そこをとび出したという一幕もありました。

子供の躰はきびしく「聞かうとしない者は(皮膚に)感じなければならぬ」という諺通り、母親が子供の頬をピンピンと張っているのを時々目撃いたします、子供がいるという事は家の中がきたない言訳にはなりません。子供達は大人と接するときにはとても行儀よく「グーテンターク」と挨拶する時には握手すると女の子はつと片足をひいて一寸膝を曲げ、男の子はビョコリと頭を下

げる。日曜日には汚れた服を着て走り廻っている子供達はみられません。一日中きれいな服をきせられ親と手をつないで散歩する位が精々です。躰についてこういうことがありました。或日家内が4才の娘をつれてスーパー・マーケットへ行ったとき、カウンターの列が長いので疲れた娘がに柵にもたれた所、後のドイツの小母さんが「ちゃんとしてなくちゃいけない」といって立たせました。そうかと思うと、私共が娘をつれて歩くと、黒い髪が珍らしいので「ジュース、ジュース、クックマール」(可愛いい〜、まあみてごらん)と注目的で菓子やら、花やらソーセイやら時にはお金までくれるのです。断るととても気嫌を損じた顔をするので、頂くことにしていますが、時に困ってしまいます。夜は子供達は簡単にパンを喰べて7時か7時半にはベットへ入りますが、これは“sollen”なのだそうです。厳格な躰も多分親に都合の身い様に出来ていると覚しき点があり、日本の子供の方が断然仕合せだと思ふことがしばしばです、

一口にいいまして、ドイツはその底力ある国力と精力と矛盾にみちた民族からなる、まことに面白い国だと思ひます、昔ドイツ人は日本を「東洋のプロシヤ」とか称したそうですが、私はそんな点でむしろドイツ人を「ヨーロッパの日本人」と呼びたい位です。

## 南天星座早見

佐藤明達\*

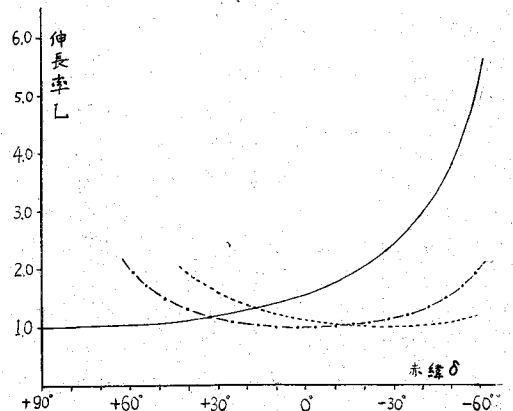
星座早見とは、周知の通り星座を描いた円盤の上に楕円形の窓のあいた円盤を重ねたもので、星座盤の周囲の日付目盛と地平盤の周囲の時刻目盛とを合わせると、その日その時の星空が楕円形の窓の中に現れるしくみになっている。この型の星座早見には、3つの欠点がある：

- (1) 観測地の緯度によって地平線の形が異なる。
- (2) 観測地の経度によって時刻が異なる。
- (3) 半球面を平面上に拡げたため、南天の星座は形がゆがんでいる。

現在最も普及している日本天文学会編「新星座早見」(三省堂発行)では、上の(1)、(2)の欠点はある程度補正できるようになっている。我が国はアメリカやソ連のように国が広くはないから、(1)、(2)の欠点から生ずる誤差はさほど大きなものではない。しかし(3)の欠点は、このような形式の星座早見である限り取り除くことはできない。星座早見を利用するのは主として小・中学生などの初心者であるから、おぼえるべき星座の形が実

際の空と違うのはまことに困ったことである。この短所を救うにはどうすればよいかを考えてみよう。

本会編の星座早見にある星図は、天の北極を中心とする等間隔の同心円を緯線、北極を通る放射線を経線とする正主距方位図法(Equidistant azimuthal projection)によって描かれている<sup>1)</sup>。この図法では経線方向の伸びは



第1図

\* 大阪市立電気科学館  
Akisato Satō: Planisphere for the Southern Sky.